

## ヤスパースの平和思想

別 府 芳 雄

### まえがき

誰しも平和を願わない人はいない。ヤスパース(K. Jaspers 1883~1969)も「われわれは、すべて、平和を欲する(Wir alle wollen den Frieden)」と述べている。問題は、平和実現の方法である。(。印筆者、以下同じ)ヤスパースは——「われわれ精神科医がビックリさせられたのは、国民のすべての層における平均的人間の知識と判断力の欠如で——“正常とは軽度の精神薄弱である”(Normal ist leichter Schwachsinn)ことを知って驚ろかざるをえないと書いている。というのは、国民は、平和は克ちとるべきものであることを忘れ、平和が、“神の贈り物”(Gottesgabe)と思っている。永世中立を宣言すれば、敵は攻めてこないと思っている。いろいろ論議した結果の“原爆に対する一致した単なる否(ナイン)”は、何ら平和への解答にはならない。“原爆死反対”(Gegen den Atomtod), “いかなる犠牲を払っても平和を!”(Friede um jeden Preis)とは耳ざわりのいい標語ではある。しかし、この思惟形式(Denkungsart)は、平和に対して正しい解答を与えるものではない。これまで、平和主義者は、平和が国の陸・海・空軍を制限または縮小することによってえられると主張してきた。ところが実際はその反対の方が真実に近い——ことは、今や常識である。

また、ヤスパースは民主主義についても次のようにハッキリ述べている。  
「民主主義はすべての可能性に対して寛容であるが、しかし不寛容に対し

ては、不寛容になりうるものでなければならない。民主主義は暴力に反対であるが——しかし暴力に対しては暴力によってみずからを主張するの  
なければならない。*(aber muss gegen Gewalt sich durch Gewalt behaupten. Die Atombombe und die Zukunft des Menschen. 1958)*」。これは、敵の暴力〔全体主義の暴力〕に対しては、断乎、暴力をもって対抗するのが真の民主主義であるということである。確かに“民主主義はひとつの理念である”(Die Demokratie ist eine Idee)ことは間違いない。しかし“理念”である以上、民主主義は、いずれの国でも“完成しているものではない”(sie nirgends vollendet sein kann)ことも確かである。要は、西欧民主主義を間違って理解しては困るということである。全体主義の暴力に対しては暴力をもって答えるべきである。また、全体主義国の原爆による暴力についても、「原爆に対する徹底的な“否”(Nein)は、全体主義への屈服の心構えをすでにふくんでいる。全体主義が世界支配に達したとしても、原爆は廃棄されないだろうということを、人は論じない。原爆は、その時ただ一手にのみ握られるだろうし、そして反乱に対する威圧と根絶との手段(Abschreckung-und Ausrottungsmittel)として仕えることになるであろう。すなわち、それはもはやただ、ひとたび支配権(Herrschaft)を握った全体主義を攻撃できないものにする手段でしかない」のだと。ヤスパースは全体主義に対抗しては、十分に軍備を整え、“力の均衡”による平和を維持する以外はないと確言する。つまり“力の均衡”のうちに“平和があるのであって、平和は神の贈りものでなく”——みずからの力で克ちとらなければならないものであり、いいかえると、困窮〔戦争は最大の困窮である〕に直面して、人間理性の力による飛躍によって平和の定立に導びかれるものだとする。

歴史は“理性の摂理”(Vorsehung der Vernunft)がつねに働くことを教えてきた。だから平和は“理性の摂理”による“自然必然性(Notwendigkeit der Natur)の実現”であり、戦争の困窮に直面して、必ず理性の力の

飛躍によって救われるものであり、もし、現在の最高の危機（人類絶滅の危機）に耐えられないとすれば、「人間は自分が人間としての生存に<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>た<sup>○</sup>い<sup>○</sup>し<sup>○</sup>ない<sup>○</sup>ことを身をもって証明した」(so hat der Mensch sich seines Daseins nicht wert erwiesen) —— というだけのことである。全体主義国の武力的威圧に対しては、軍備を拡充し、断じて“隷従の道”を選んではならない。十分な備えをもちつつ、平和への努力を続けるなら“力の均衡”の極限において、理性の飛躍によって、人間に平和の道を選ばしめるものなのである。

以上の点を理解して戴けるなら —— 1982年1月25日付の日本国際問題研究所における“ソ連の総合国力の評価”と題する特別プロジェクトの研究グループが鈴木善幸前首相に提出した資料の結論部分——「わが国としても、独自の判断に立って——海上自衛力の整理、防空能力の強化を含めて、自衛力増強努力を行なう必要」ばかりか、他方では「軍備増強の相互抑制への交渉に導びく努力」の必要（加藤寛氏ほか『現代ソ連経済の構造』）ということの意味が理解できるはずである。

小論は、ヤスパーズが全体主義（ナチス）から受けた“死と飢え”の恐怖の体験を通じて体得した彼の平和思想を述べてみたいと思う。

## I. 哲学的自伝(philosophische Autobiographie, 1953)から

ヤスパーズが生涯にわたって、哲学的思索の道につくに至った事情や彼が追求した目標については、彼の1953年（ヤスパーズ70才時）作の『哲学的自伝』から知ることができる。

ヤスパーズは、マルクスが死んだ年、つまり1883年に生まれている。「私は1883年2月23日、北海の海岸にほど遠からぬオルデンプルグ<sup>1)</sup>(Oldenburg)で生まれた」という書き出しで始まっている。1892年（ヤスパーズ9才時）から1901年（18才時）まで、オルデンプルグのギムナジウ

ムで教育を受け、以後3学期間、ハイデルベルクとミュンヘンの大学で法学を学び、次いで医学を修め、1907年(24才時)、医師国家試験に合格する。その後、ハイデルベルク大学の精神科教室の無給助手。1913年(30才時)、心理学私講師となり、[1914年夏学期から講義開始] 1922年(39才時)、ハイデルベルク大学の哲学正教授となっている。

高校在学時に、“不当にも学校に入り込んでいる”軍事教練(die militärische Disziplin)に反対して、校長と衝突したことがある。

1909年(ヤスパース26才時)、たまたまマックス・ウェーバー(Max Weber)(当時45才)と知り合い、ウェーバーから終生変らぬ思想的感化を受ける。彼は「ウェーバーの基本的見解(Grundeinsicht)を素直に学び取り、受け容れた<sup>2)</sup>」と書いており、「ウェーバーは彼の思想と存在のゆえに、今日に至るまで、私の哲学にとって-----きわめて重要な意義をもつ<sup>3)</sup>」とさえ述べている。

1914年6月(ヤスパース31才時)、第1次世界大戦が勃発し、1918年11月、ドイツの敗戦で終わったが、ウェーバーの主張は「同じ占領されるにしても、アングロサクソン人(Angelosachsen)やフランス人(Franzosen)による場合、われわれはわれわれの本質を失わぬであろう。何となれば彼らはそれを抹殺しようとも思わぬし、また、それをなしえぬであろう。しかしロシアの支配(russische Herrschaft)に服すると、——他のすべての国民もかかる政治体制下では、その国民のままに存続できぬのと全く同じく——われわれもドイツ人として存在することを止めるであろう(würden wir aufhören, Deutsche zu sein)。だから、マックス・ウェーバーは、第1次大戦におけるドイツの唯一の功績を“ロシアの勢力をここまで喰い止めた”(die russische Macht für diesmal aufgehalten habe)という点にみていた<sup>4)</sup>」ようである。

因みに、付記しておきたいことは——1919年正月、ヤスパースがウェーバーに最後に会った時〔注. ウェーバーは1920年6月14日死去〕のウェー

バーの答である。ヤスパースがウェーバーに「もし、 коммуニストが政権を握ったばあい、何をしたらいいか (was zu tun sei) と尋ねたとき、ウェーバーの答えは“そうなったばあいには、ことはもはや私の興味を惹きませんな” (Dann interessiert die Sache mich nicht mehr) といった」<sup>5)</sup> そうである。全体主義支配下では、人間が人間として“生きるに価する生” (lebenswertiges Leben) をえられない——その社会は、生きるに価しないから関心がないということであった。

ところで、1910年(ヤスパース、27才時)、敬虔なユダヤ人の家庭出身(aus einem frommen judischen Haus)のゲルトルート・マイヤー(Gertrud Mayer)と結婚した。また大著『精神病理学総論』(Allgemeine Psychopathologie, 1913)〔1948年刊の第5版の完訳が、故・内村祐之名誉教授ほか3名の東大神経科の若き俊才によって、昭和28年10月以降、岩波書店から逐次出版された〕を30才時に公刊している。1919年『世界観の心理学』(Psychologie der Weltanschauungen)を公刊。ヤスパース自身、この「〈世界観の心理学〉は ----- いわゆる現代実存哲学 (moderne Existenzphilosophie) とよばれるにいたったものの最も早期の著作」<sup>6)</sup> であると確言している。

さて西南ドイツ学派の創唱者、ヴィンデルバンド(Wilhelm Windelband 1848~1915)が逝去され、1916年、リッケルト(Heinrich Rickert 1863~1936)が哲学正教授として、ハイデルベルクに招かれてきた。だがリッケルトは、ヤスパースと初対面の時から、“精神医学と哲学”の両方を攻究するヤスパースを“虻蜂取らず”になると冷笑した。

1920年6月14日、マックス・ウェーバーが56才でミュンヘンで急性肺炎で死去。ヤスパースは、ハイデルベルク学生組合の招きで、ウェーバーの追悼演説(Gedenkrede auf Max Weber)をおこなった。この演説の内容が原因で、ヤスパースとリッケルトは反目することになる。というのは、追悼演説の内容がリッケルトには気に入らない。だからリッケルトはヤスパ

ースにこういったそうである。「君がマックス・ウェーバーから、ひとつの哲学を編み出そうと、それは君の勝手だ。しかし君が彼「ウェーバー」を哲学者と呼ぶなどとは、非常識きわまる」(*Dass Sie aus Max Weber eine Philosophie machen, mag Ihr gute Recht sein, dass Sie ihn aber einen Philosophen nennen, ist Unsinn*)と。“それ以来、リッケルトは私の敵でした”とヤスパーズは書いているが、ヤスパーズとリッケルトが決裂したのは、この時以来である。(リッケルトには“実存哲学”というものが、まだよく理解しえなかったのではあるまいか)。

1921年、ハインリヒ・マイアー(Heinrich Maier 1867~1933)がベルリン大学に転出したため、1922年4月1日付で、ヤスパーズは、ハイデルベルク大学の哲学正教授に就任することになる。

1931年10月(ヤスパーズ48才時)『現代の精神的状況』(*Die geistige Situation der Zeit*)を10月初めに、ひき続いて、12月には『哲学』(*Philosophie*) (全3巻)を出版した。ここにヤスパーズの名声は不動のものとなった。

ところが、1933年、ナチスは、いわゆる授權法(*Ermächtigungsgesetz*)を成立させる。〔以来、1945年まで、12ヶ年も、ヤスパーズはナチスの弾圧下におかれる〕。ナチスの政権獲得によって、ヤスパーズは「1933年以降は、予想もされぬことどもを、否応なく経験させられた。人間が恐るべき状況のせいでいかなるものに変貌しうるか-----多くの人間が無思慮のせいで、利己的近視的受け身の態度のせいで、どう変ってしまうものか<sup>7)</sup>」を経験させられることになる。

前に述べたとおり、ヤスパーズ夫人はユダヤの名門の出身であった。1937年、ナチは、夫人がユダヤ人であるという理由で、当時、ハイデルベルク大学の正教授であったヤスパーズに対して、“夫人と離別するか、そうでなければ大学からの追放か”という非情な二者択一を突きつけてきた。こうしてヤスパーズは教授の職を剝奪されてしまう。つまり、「1933年以

降、大学運営への参加(Mitwirkung an der Universitätsverwaltung)から閉め出され、1937年には教授職を剥奪(berauben)され、1938年以降は、もはや何も出版を許されず (durfte ich nichts mehr veröffentlichen)<sup>8)</sup>といったナチの迫害のもとにさらされる。だからヤスパースは書いている——「ドイツ人にとっては、1933年の、この破局は、残酷な忘れられないものをもっている。非常に多くの知的な人間、非常に多くの善意の人間が、突然、何が何やらわからなくなって、羊の群 (eine Hammelherd) と化し<sup>9)</sup>」てしまったのだと。ヤスパースは、自分の国にありながら法的保証(Rechtgarantie)を喪ったまま、沈黙を強制させられ——「妻とともに、抵抗することもできず、長年にわたって、生命の存在の脅威を<sup>10)</sup>」体験させられる。ヤスパースは、その当時は「わたしたちを取り巻いていたのは、じっと耐えねばならぬ状況(Situation des Aushaltenmüssens)、予知されぬ恐怖におののく状況のなかで、息を殺してひそんでいる静寂(die Stille der Verbogenheit)<sup>11)</sup>」であったと述懐している。

1945年4月1日、アメリカ人がハイデルベルクを占領した。じつは、ヤスパース夫妻の強制収容所行きは、数週間前から決められていたそうであるが、夫妻はここで間一髪救助されることになる。ヤスパースが「ドイツ人がナチス国家の名において(im Namen des nationalsozialistischen deutschen Staates)、自分を殺そうとしたのとは反対に、自分と妻の命がアメリカ人のおかげで救われたという事実を、私はドイツ人のひとりとして、忘れることはできない<sup>12)</sup>」と述べているように、夫妻はアメリカのおかげで解放された。

1948年(65才時)、バーゼル大学教授となり、1949年(66才時)『歴史の起源と目標』(Vom Ursprung und Ziel der Geschichte, 1949)を公刊。1957年(74才時)に『原爆と人間の未来』(Die Atombombe und die Zukunft des Menschen, 1957)を、1958年(75才時)には、『哲学と世界』(Philosophie und Welt, 1958)を公刊した。しかし、1961年(78才時)に

は、バーゼル大学を退き、1969年2月26日、86才でバーゼル市アウシュトラッセ(Austrasse 126, Basel in der Schweiz)で死去された。

断っておくが——小論Ⅰの「哲学的自伝から」は、ヤスパースの単なる畧伝を述べているのではない。“全体主義の恐怖”の運命に対決してきた彼の長い人生の歩みを述べているのである。ナチズム(Nationalsozialismus)やボルシェヴィズム(Bolschewismus)が、われわれにとって、不倶戴天の敵(Todfeind)であることを訴え、——彼が、ナチズムの抑圧を運命として受けとめ、それに耐えてきた彼の歩みの記録を述べているのである。恐るべき全体主義の“暴力の恐怖”(Terror der Gewalt)の実態を示し“それをあらしめてはならぬ”(es soll nicht sein)といっているのである。ヤスパースが「哲学的思考の重要な今日的課題は、哲学的思考そのものを襲って、それを否定しようとする勢力(Mächte)に気づくこと<sup>13)</sup>」だと述べているとおり——全体主義は「極端なシニシズム(Zynismus)をつうじて人を制圧<sup>14)</sup>」するもので、「嘘をつくのに真理をさえ利用するような虚偽がある。そうした勢力は、理性を破壊するために悟性を用い、じっさいの自由を奪うために「おのれの」自由を要求する<sup>15)</sup>」もので、まさに「悪魔的だということが出来る」(Man kann sie luziferisch nennen)ものである。だから哲学の課題は「そうした勢力と精神的に戦うこと<sup>16)</sup>」であると述べているとおり——まさしく、“そうした勢力と精神的に戦ってきた歩み”を、Ⅰ.「哲学的自伝から」は述べているのである。

## Ⅱ. 平和思想

われわれはすべて、平和を欲する。すなわち「いかなる戦争もない、大量せんめつ兵器(Die Massenvernichtungswaffen)がもはや決して使用されない、そして原爆による終末(das Ende durch die Atombombe)がやって来ない<sup>●●●●</sup>外的平和(der äussere Friede)を欲する。かかる平和は世界平和



(Weltfriede)としてのみ可能である ----- 平和政策は世界政策<sup>17)</sup> でなければならない。

いま平和を<sup>●●●●</sup>内的平和と<sup>●●●●</sup>外的平和に区分して考えてみると〔外的平和とは国際間の平和のこと〕, 「平和とは戦争のないことではない(Friede ist nicht Kampflosigkeit)-----平和は各自の家庭から始まる。世界平和は諸国家の内部の平和と共に始まる<sup>18)</sup>」もので——国内平和, 個人の精神的平和(=内的平和)と相伴うものなのである。いいかえると「個々の人間の内的平和(der innere Friede)ともろもろの国家間の平和〔外的平和〕は, 自由によってのみ存しうる -----, 国家の外的自由(Äussere Freiheit)と, その統治様式(Regierungsart)による内的自由とは, 個々人の実存的自由の結果, 保たれるもの<sup>19)</sup>」で——ふつう, われわれは“まず平和, ついで自由を!” (Erst der Friede, dann die Freiheit)——というが, これはゴマカシであって, “まず自由, ついで世界における平和” (Erst die Freiheit, dann der Friede in der Welt!)があるのでなければならない。なぜなら, <sup>●●●●</sup>内的自由なくして平和はありえないからである。「その時だけ存立する外的平和は, 人間そのものの根底において保証された平和ではない。こういう平和は, 個人の“自由なきこと”(Unfreiheit)の事実上の不満から, ただちに再び戦争へ (bald wieder zum Kriege) と通ずる<sup>20)</sup>」ものである。だから, まず<sup>●●●●</sup>内的平和を確保し, <sup>●●●●</sup>外的平和を維持する必要がある。それには, 個人的自由がなくてはならない。

現在, 「政体としての民主主義は, 決して自由〔があるもの〕とはいえない-----したがって民主主義は, 国民が民主主義の理念を獲得して, それによって市民として自由となりうるチャンスでもある。たんに形式的な自由 (die nur formale Freiheit) は, たやすく失われてしまう<sup>21)</sup>」ばかりか「たんに形式的な民主主義は, それ自身“全体主義”(totale Herrschaft)を生み出す<sup>22)</sup>」危険を孕む。なぜならば「民主主義は自由なくしては可能ではない。民主主義は自覚的に自由に結びつけられていなければならない

い。そうでなければ、それは衆愚政治(Ochlokratie)や専制政治(Tyrannis)に墮してしま<sup>23)</sup>う」危険をもつからである。したがって、当然、外的平和は維持できなくなることは、カントが『永久平論』(Zum ewigen Frieden, 1795.)の第1確定条項で示すとおりである。つまり戦争の端緒となってしまう。

ところで、戦争と平和は対立概念ではない。戦争と平和というところ——“寒さ”と“暑さ”のような、また、“白”か“黒”か——というように対立概念と思ひ勝ちであるが、戦争と平和は対立概念ではない。平和はすでに戦争を含んでいる。だから、“平和とは戦争のないことではない”のである。平和を確保したいと思うなら、要は、現在をよく自覚することである。「ひとり現在のもののみが現実的<sup>24)</sup>」(Aber wirklich ist allein das Gegenwärtige)なのであり、しかも「われわれは、いつも未完のままの転変極わまりのない無常<sup>25)</sup>」(die Zeit des stets unvollendeten Anderswerden-müssens)のなかにおかれているのである。だから救いは、清明な意識からもたらされる。未来を怖れる意識の正しさによって恐るべき未来の到来を阻止しうるのである。

われわれが限界状況としての現代を直視したばあい、「こんにち、世界情勢は危急を告げており(die Weltlage ist drohend)-----世界平和こそが唯一の救い(die einzige Rettung)<sup>26)</sup>」であることが明らかである。人間は途方もなく巨大な人類殺戮兵器を作りあげた。「原子爆弾(水素爆弾、コバルト爆弾)は原則的に新しい出来事(ein grundsätzlich neues Ergebnis)である。それは、人類を、人類自身による人類全滅(total Vernichtung durch sich selbst)の可能性に導びく<sup>27)</sup>」からである。〔水爆は、だいたい原爆よりも100倍強力である〕。

参考のため、本年1月12日のソ連科学アカデミー会員、ボチコフ氏の発表による原爆の恐怖すべき惨状の様相を付記してみよう。\*

\* 1984年1月13日、ジュネーブ12日＝共同報道——ボチコフ・ソ連科学アカデミー会員の発表によると「全面核戦争で合計1万メガトン（広島原爆50万個相当）の核兵器が使用された場合、アジアで7億1千7百万人、欧州で2億4千9百万人、北米で8千9百万人など全世界で11億5千万人が即死、10億9千5百万人がやけどや負傷すると予測される。全人類の約半数がけがなどをせずに生き残るが、世界のほとんどの地域で主要都市、交通網が破壊され、生存者たちは直ちに食糧の欠乏、飲料水の不足と放射能汚染、病気のまん延に苦しむことになる——核爆発で大気圏上層に吹き上げられた灰や土砂が地球を長期間覆い、太陽を遮るため、地球上の気温が一気に零下10度から同40度程度に低下、家や衣服のない生存者たちを凍えさせ、農作物を壊滅状態にしてしまう。ソ連科学者たちが特に重視するのは放射能による長期的影響。まず白血病の患者が10億人の生存者当たり8百万ないし1千万人発生。ほかに同人数当りガン患者が1千万人増加、ガン死亡率も5～17%増加する。

生存者から生まれる子供たちの約3分の1が遺伝的に異常を持って生まれ、異常は幾世代にもわたって遺伝する」と。（1984年1月13日（金）『朝日新聞』夕刊，35212号掲載）

ヤスパースが、現代核兵器の恐威は「こんにちでは、人間の行為によって、地上の生命の全滅(die totale Zerstörung des Lebens auf der Erde)〔さえ〕も可能になってきている<sup>28)</sup>」と訴えているのは、原爆によるかかる被害の惨状を予知していたからに他ならない。だから彼は「こんにち戦争は、その手段の規模(das Ausmass seiner Mittel),そのもたらす結果の甚大さ(die Grösse seiner Folgen)によって、様相を一変したように思われる。戦争の意味は従来とは全く異ってしまったのだ(Sein Sinn ist ein anderer geworden)<sup>29)</sup>」と述べている。

しかも、新たな戦争がおこれば，“確実に原爆がおちてくるであろう”——と考えるとき、われわれは“世界終末の現実的な可能性”(reale

Möglichkeit eines solchen Endes)を眼前にしていることを承知しておかねばならない。

しかし失望するのは、まだ早い。ヤスパースはいう——「私が極限的なものに直面して怯(ひる)むとき、理性は、“生きている限り希望を棄てるな”(die Hoffnung nicht aufzugeben, solange man lebt)<sup>30)</sup>と」教えると。つまり、まだ“理性的行為の可能性による希望”(die Möglichkeit vernünftigen Tuns)が残っている。確かに科学技術は予想しえない破壊と惨禍をもたらすかも知れないが、このことは“人間が火を燃やすことを覚えた最初の瞬間から、技術の本質であった”はずであり「技術は単に手段であって、それ自体、善でも悪でもない」<sup>31)</sup>が、しかし“善にも悪にも同じく奉仕する”(Sie stehen im Dienste des Guten ebenso wie des Bösen)ものである。いうまでもなく、技術は人間悟性の産物である。技術は人間によって生み出されるが、技術がそれ自体で人間を脅かすのではなく、人間自身が人間を脅かすのである。「技術は悟性の働きに立脚(Technik beruht auf Verstandesarbeit)するもので——技術とは合理化一般の一部(Sie ist ein Teil der Rationalisierung überhaupt)<sup>32)</sup>」にすぎない。すなわち、技術は必ず限界をもっている。だから、まだ、“理性的行為の可能性による希望”が残っている。

歴史のもろもろの事件は、予期しないことをもたらし、破壊をもたらしたが、しかし救済をももたらした。だから、われわれは、人類絶滅の直前という限界状況において啓示されるものに耳を傾ける必要がある。

では、“理性的行為の可能性による希望”とは何か。それは人口政策である。しかし南亮三郎博士のいわれるように、「人口政策には、やはり、はっきりした一つの目標が——したがって一つのintention(志向)が存しなければならない。そのintentionは主として経済的、社会的、および生物学的な観点から決定されるのであって、そういうintentionにもとづいた人口諸要因への干渉——それが人口政策であり」<sup>33)</sup>それにもかかわらず「こ

の領域が学問的に未開拓の処女地として残されてきたことは「むしろ」不思議<sup>34)</sup>なくらいであったものである。

ヤスパースの(intention)(志向)が、この“未開の処女地”たる人口政策に向けられていることは注目すべきである。すなわち彼は「一定量の人口を維持すべき相互の義務づけが契約される国家間の条約(Staatsverträge)<sup>35)</sup>」にもとづく“人口調節”(der Ausgleich der Bevölkerung)を提唱し、のみならずヤスパースは「地上の人口過剰による結果の戦争の爆発を避けるためには、ただこの出口だけが存在するのみ(Um der kriegesischen Explosion infolge von Überbevölkerung der Erde zu entgehen, gibt es nur diesen Ausweg)<sup>36)</sup>」とさえ確言している。〔けっして、素朴な産児制限論を述べているのではなく——世界各国の相互理解と協力こそが過剰人口の解決策だというのである。〕

### Ⅲ．人口思想

原爆とならんで平和を脅威するものとして人口圧の問題がある。

まず、「歴史的事実として、はっきりしていることは、古来行われてきた人口政策的実践がおしなべて出産奨励、人口増加奨励の目標をもっていたことである。出産の抑制をある程度、間接的ながら、国の政策として取ろうとしたのは、19世紀の初頭、T.R.マルサスの影響をうけた一時期に限られている。むろんここでは第2次大戦後、低開発諸国が取ろうとしている人口政策は別だが、欧米先進諸国の歴史的経過に関するかぎり、人口政策は、おしなべてpro-natalistの政策<sup>37)</sup>」であった。しかし、「たとえ人口は増加するにしても、それによって国民の経済的福祉が低下するなら、その人口増加は望ましいと言えず、逆にまた人口増加が停頓して国民の経済的福祉が削減されるなら、その人口減退は望ましいとは言えない<sup>38)</sup>」はずである。

ヤスパースはハッキリと出産抑制政策を提唱する。周知のように「“人

口の波”は出生数から死亡数を引いた人口の自然増加が歴史的な波動をえがいて上下すること、したがって、そこには人口の突進と停滞ないし減退が時間の経過とともに生ずることをさしている。ある時期に人口の突進がおこったかと思うと、つぎの時期にはその停滞ないし減退があらわれる<sup>39)</sup>ものである。つまり「人口は長きにわたって静止することなく、たえず波状をえがいて運動を続ける」ものである。

現在は“人口突進(または爆発)”の時期を迎えている。具体的にいうと——現在の世界の人口は、46億であるが、〔注. 20世紀を迎えたときの世界人口は16億〕毎日、約17万人ずつ増加を続けており、1年で約7,000万人の増加となる。〔1951～61年の10年間の人口増加は約5億人、1960年代だけで、およそ7億の人口増加があった〕。紀元2000年の世界人口は62億7,000万人と予測されているが——これは1970年の世界人口の約3分の2が新たに地球上に加わる見込み————ということを意味する。考えてみると——現在の世界人口は、ほぼ40年毎に2倍となっている。人口密度は、1964年(ヤスパース、81才時)1平方マイル当り、61.4であったのに、1975年には、74.0、2000年には、113.3となる見込みだから、いかに激しい人口爆発の時期を迎えているかがわかってる。

ヤスパースは、まず世界人口増加について、「こんなにも上昇カーブを描いているばあい、将来どういうことになるだろうか」<sup>40)</sup>(Was bei der steigenden Kurve in Zukunft werden wird)と、まず増大し続ける人口突進(爆発)を問題として取りあげる。つまり「いっさいのものが、そのなかで溺れかねない洪水のような、かくも巨大な人間集団」<sup>41)</sup>の出現に対して批判の目を向け、現在の人口増加傾向を抑止し、人口を安定化させねばならないと訴える。「一国における産児制限(Geburtenbeschränkung)が可能であることは、日本の歴史の遠い昔の一時期が示している。それを全世界的にすること」<sup>42)</sup>がこのさい必要であると主張する。

なぜ人口の安定化が必要なのか。それに対するヤスパースの答えは“地

球人口の増大は、基本的な事実性によって平和を脅威する”(Vermehrung der Erdbevölkerung bedroht den Frieden durch eine elementare Tatsächlichkeit)からだ、という。すなわち「はかり知れない要因が沢山あるので、地球人口の最大限についての予言は可能ではないが——しかし、それが成立することには、いかなる疑いもない。静かな、当面は気づかれない、全体としては望まれていない地球人口の増大は、基本的な事実性によって平和を脅威する<sup>43)</sup>」からであると。つまり「出産数(Geburtenzahl)による諸民族の等しからざる増殖は、今までは制御されないでおこった。それは、そのつど隣接領域への人口圧(Bevölkerungsdruck)が成立する点に到達した。ひとは移住し、より少い居住地域(weniger besiedelte Räume)に流れ込み、植民し、征服した。“土地なき民”(Volk ohne Raum)が、つい先頃までは、すでに戦争への意思(Willen zum Krieg)を意味する切なる訴えであった-----“土地なき民”は、悪しき、傲慢な、忌むべき、戦争への呼びかけ(Kriegsruf)となった<sup>44)</sup>」ものなのである。ところが、いま地球の“領土上の境界は硬化している”(Die territorialen Grenzen sind erstarrt)ので、移住など全く不可能にちかい。だからヤスパースは「この硬化が、人口増加の度合によって人口密度(Bevölkerungsdichte)がはなはだしく異ったものになるとときには、[むしろ]不正にさえ感じられる<sup>45)</sup>」といい、具体例として「こんにち西洋諸民族(die abendländische Völker)は人口静止状態(Bevölkerungsstillstand)に近づいている。他方、アジア諸民族(アフリカ、南アメリカの諸民族もそうだが)は、その人口増大の速度をなお年々たかめている。-----東アジアとインドとの大量さの印象は、飢えと不穏とのうちで、猛烈に増大していて、あたかも増大する洪水のごとく(wie eine wachsende Flut)、圧倒的(gewaltig vermehrend)という他はない。[もし]この大量の人間が技術と兵器を所有することになれば、地球全体を荒しまわることができるかのごとき増加ぶりである。遠からぬうちに、さし迫ったものとなろうし、そして熟慮されねばなる

まい<sup>46)</sup>」と述べている。低開発国の現状は——南博士が述べておられるように——「低開発国では、一人当り実質所得の着実な上昇が前提となることなしに、医薬衛生施設の画期的な導入をうけて、死亡率のみは急速に低下をみせはじめた。いっぽう出生率は依然として高いのであるから、低開発国の人口増加は前代未聞の高率となっている。年2%あるいは3%の自然増加率は現在の低開発地域のいたるところに見うけられる<sup>47)</sup>」という状況を示している。したがって、低開発諸国の過剰人口の問題は、放置（ないしは無視）してはならない問題なのである。

なぜ、低開発諸国の人口爆発が放置されてはならないのか。なぜ、それが、“戦争への呼びかけ”(Kriegsruf)となるのか——というと、周知のように、人口と食糧とエネルギー資源とのあいだには、一つの関連があるものであって「地球には定員がある」、——このような人口の爆発的増加が、この均衡的関連を破綻させるからである。「世界のエネルギー消費量は、ほぼ12年毎に2倍になる速度で増大している」ヤスパースは、すでに1949年刊の『歴史の起源と目標』のなかで「まず、自然が、いまや資源の面で脅やかすだろう。自然の限られた可能性は、早くも短期間のうちに、歴史を新たな状況につれ込むであろう。現在の割合で消費すれば、石油(das Erdöl)はもっと早期に、鉄鉱床(die Eisenlager)は早くも2百年のうちに掘りつくされるであろうし、農産物に不可欠の燐(Phosphor)は、なおいっそう急速に枯渇するだろう。長期にわたって原子エネルギーが得られる可能性があるウラン鉱(die Uranerze)が、どれほどの速さで消費されるものであるかは、今のところ計量できない。個別的に見れば、何ら正確な計算は可能ではない。しかし限りある資源を消費する無屯直さ(Unbekümmertheit)を見れば、いずれにせよ、徹底的な終り(ein radikales Ende)が、限られた時間内に、可能ないし、ありうべきことであると予言して差し支えない。

そうなれば、人類は、ちょうど5千年前にあったのと同じ人口に減少せ



ざるをえないのか、新たな突破口(neue Auswege)が見いだされるものかどうか、人間の魂の持ち方や精神的態度が、どのような歴史的現象を呈し、どのような倒錯状態にあるときに、この破局への突入が行なわれるものなのか、こういった問題は予言的には判断できない。ただひとつ、確実に予言できるのは、今後は再び昔と同じようには、いかなる安定状態も存在しないだろうということである<sup>48)</sup>」と述べている。というのは、「人口の抑制されない増大は、そのものとして、すでに潜在的な征服行為(ein potentieller Eroberungsakt)<sup>49)</sup>である」のだから、無制限な人口増大そのものが、すでに“無法(むちゃな)行為(Gewaltakt)”なのである。このことは、「無力な残余の国々(低開発諸国)が、産児数(Geburtenzahl)の超過のため、飢餓と死の悲惨さ(das Elend von Hunger und Sterben)を招いている<sup>50)</sup>」のを見れば首肯しうるはずである。世界人口の3分の1、あるいは、それ以上を擁する国々で、現在、平均食物摂取量が、人間の成育に必要な量以下しか与えられていないし、第3世界では、年々、少なくとも1.000万以上の人びとが飢死していること——を考えれば、“無制限な人口増大”そのものが、すでにムチャな行為というべきものなのである。しかも過剰人口による欠亡状態は、戦争への可能性を孕むから、今後は、いかなる安定状態も存在しないだろう(es wird dann wieder keinen stabilen Zustand geben)と断言しうる。安定状態がありえない、ということは、不安定状態が続く、ということである。だから以前なら、人口爆発にいたったものを、合法的な形式で人口安定化に導びくことが緊急の課題であろうし、世界平和にかんする現代の中心課題は、過度な継続的人口増加にブレーキをかけることでなければならないといえよう。

この人口圧による平和攪乱を防止するには、どうしたらいいか。

ヤスパースは“新しい政策”(Die neue Politik)が必要だという。つまり、国際間の契約による人口安定化を提唱する。すなわち、人間は「秩序と制限について、人間が地球人口として、相互に協調(miteinander

übereinkommen)するならば、——意志によって、破局なき発展を産児制限によって築く能力をもつ<sup>51)</sup>」と述べ、「一定の人口を維持すべき相互の義務づけ (die gegenseitige Verpflichtung)が 契約 される 国家間の 契約 (Staatsverträge)<sup>52)</sup>」によって可能になるという。

これは、ヤスパースが、「学問分野における未開の処女地」と南亮三郎先生がいわれた人口政策を早くも展望し、構想していたことを意味する。南博士は、「期待せられるのは、国際的な共同責任の自覚と国際協力——かつての日に〈軍縮会議〉があったように、われわれの世界は〈人縮会議〉とはいわないまでも〈人口計画会議〉が必要<sup>53)</sup>」であると述べられ、「ただ漫然と世界人口の数におびえ、小家族制を礼賛しているだけでは無意味<sup>54)</sup>」と教示されたが、——ヤスパースも、全く同じである。ただヤスパースは「不変の自然的基礎のうえに、歴史的に登場してくる人間の本質について、もう一押し (ein Ruck) がなされなければならない<sup>55)</sup>」という。どういう“一押し”かといえば——それは“人間の転回” (die Umkehr des Menschen)が必要であるということである。つまり「偉大なる政策は理性の自己教育」であるから、人間を「転回へとみちびく政策こそが、みずからを助けるものでなければならない」のであって、これまでのような人間軽視 (die Verachtung des Menschen) を速やかに止めるべきである。人間軽視こそは「他人の生命を冷淡に、消耗品的に、破壊的に扱う」根拠となるものである。だから、人間に対する人間の考え方を、まず転回する必要がある。

人間の魂 (こころ) のもちかたや精神的態度の転回 (Umwaltungen menschlicher Seelenhaftigkeit und Geistesart) がどうしても必要である。

だから——ヤスパースはいう——「神は人間を時代的に次のような選択の前に立たしているのである。すなわち、生に値するよき人間へと人間が変わるという条件のもとでの人間の永続か、それとも滅亡か (Entweder Dauer oder Untergang)——という選択の前に。原爆死からの解放は人間

が、わが身はもとより——いっさいのものを昔のままに放置するなら  
(wenn der Mensch alles beim alten bleiben lässt) 成就しないのだ<sup>56)</sup>」  
と。つまり人間の価値観まで転回することによって、平和がもたらされる  
ものなのである。

## 結び

以上、ヤスパースの平和思想について、a)原爆の危機の問題とb)人口爆  
発の危機の問題に分けて述べた。また平和確保のための人口政策思想につ  
いては、彼が“新しい政策”への必要性として、国際政治の立場から提唱  
したことを述べた。平和は神の贈りものとしてでなく、人間の努力で克ち  
とるべきものであることを強調していることも述べた。

われわれが1984年のいま、この限界状況としての現代を直視したばあ  
い、1)人類は原爆戦争による人類絶滅の危機と、2)人口爆発の結果とし  
ての人口圧による平和の脅威のなかにあることがわかるであろう。

まず1)の原爆の脅威については——こんにちのわれわれは、“世界終末  
の現実的可能性”のなかにおかれており、しかも暫しの平和が“原爆の脅  
威の均衡”による不安のなかで保たれていることを知っている。ヤスパー  
スの主張は、この際、われわれは、盲目的な不安を棄て——蓋然性を確実  
性と誤ることなく——“理性的行為の可能性による希望をもて”というこ  
とであった。つまり、備えあるとき、われわれは、広い地平に果敢な決意  
を見出すことができるのである。2)の人口政策思想については——地球人  
口の安定化を提唱し、“新しい政策”の必要、すなわち“国際間の契約に  
よる産児調節”の実施により——爆発的人口増加に対する国際協調により  
——人口の安定化を計る必要性を提唱したことを述べた。また、今後は、  
われわれは人間に対する価値意識の転回が必要になるであろうというヤス  
パースの主張も述べた。今後は、これまでのような“生めよ、ふえよ、地

に満ちよ”というような考えかたは変革されねばならない。

ヤスパースが1969年2月26日〔奇しくも、ゲルトルート夫人の誕生日にあたる〕、86才で逝去されてから、すでに15年になる。ヤスパースが全体主義の脅威に対して、少しもひるむことなく、それを、みずからの運命として引き受け、断乎、運命との闘いの姿勢をくずさなかったことは、小論・Iですでに述べた。

ヤスパースが“学問分野における処女地”（南亮三郎先生）といわれる人口政策に、早くも着目し、“新しい政策”として構想提唱している点は、ヤスパースが、たんに偉大な哲学者として、哲学の分野においてばかりでなく、人口思想家としても、すぐれた先見性をもっていたことを示すものである。

以上を、小論は述べたつもりである。

- 注 1) K. Jaspers. Philosophische Autobiographie, Philosophie und Welt, R. Piper & Co Verlag. Munchen, 1963. S. 276.  
2) ibid., S. 347.  
3) ibid., S. 306.  
4) ibid., S. 346. ○印引用者。  
5) ibid., S. 346.  
6) ibid., S. 305.  
7) ibid., S. 351.  
8) ibid., S. 353.  
9) K. Jaspers. Die Atombombe und die Zukunft des Menschen, Deutscher Taschenbuch Verlag, 1964. S. 300.  
10) K. Jaspers, Philosophische Autobiographie, op. cit., S. 353.  
11) ibid., S. 368.  
12) ibid., S. 353.  
13) K. Jaspers. Was ist Philosophie ? R. Piper & Co Verlag, München, 1976. S. 133.  
14) ibid., S. 133.  
15) ibid., S. 133.  
16) ibid., S. 133.  
17) K. Jaspers. Wahrheit, Freiheit und Friede (1958), Philosophische

Aufsätze, Fischer Bucherei, 1967, S. 43.

- 18) ibid., S. 44.
- 19) ibid., S. 44.
- 20) ibid., S. 45.
- 21) ibid., S. 45.
- 22) ibid., S. 45.
- 23) K. Jaspers. Vom Ursprung und Ziel der Geschichte, R. Piper & Co Verlag Munchen, 1964. S. 206.
- 24) ibid. , S. 193.
- 25) ibid. , S. 196.
- 26) K. Jaspers. Wahrheit und Friede, op. cit. , S. 45.
- 27) K. Jaspers. Die Atombombe und die Zukunft des Menschen, op. cit. , S. 13.
- 28) ibid. , S. 13.
- 29) K. Jaspers. Vom Ursprung und Ziel der Geschichte, op. cit. , S. 259.
- 30) K. Jaspers. Die Atombombe und die Zukunft des Menschen, op. cit. , S. 331.
- 31) K. Jaspers. Vom Ursprung und Ziel der Geschichte, op. cit. , S. 161.
- 32) ibid. , S. 131～2.
- 33) 南亮三郎『人口政策』千倉書房, 昭和50年(第3版), 105頁。
- 34) 同書, 101頁。
- 35) K. Jaspers. Die Atombombe und die Zukunft des Menschen, op. cit. , S. 133. ○印引用者。
- 36) ibid. , S. 133.
- 37) 南亮三郎『人口政策』千倉書房, 昭和50年(第3版), 102頁。
- 38) 同書, 103頁。
- 39) 南亮三郎『人口思想史』千倉書房, 昭和57年(第4版), 1頁。
- 40) K. Jaspers. Die Atombombe und die Zukunft des Menschen, op. cit. , S. 132.
- 41) ibid. , S. 299.
- 42) ibid. , S. 133.
- 43) ibid. , S. 132.
- 44) ibid. , S. 132. ○印引用者。
- 45) ibid. , S. 133.
- 46) ibid. , S. 132.
- 47) 南亮三郎『人口思想史』前掲書, 25頁, ○印引用者。

- 48) K. Jaspers. Vom Ursprung und Ziel der Geschichte. op. cit. , S. 185.
- 49) K. Jaspers. Die Atombombe und die Zukunft des Menschen, op. cit. , S. 133.
- 50) ibid., S. 133.
- 51) ibid., S. 133.
- 52) ibid., S. 133.
- 53) 南亮三郎『世界人口と発展途上国』千倉書房, 昭和49年, 112頁。
- 54) 南亮三郎「20世紀に至るまでの世界人口」(『20世紀の世界人口』昭和58年, 千倉書房, 13～14頁所収)
- 55) K. Jaspers. Die Atombombe und die Zukunft des Menschen, op. cit. , S. 137.
- 56) ibid. , S. 224.